観光振興、どう取り組む

グローカルインタビュー

愛知県知事

大村 秀章氏

おおむら・ひであき　1960年、愛知県碧南市生まれ。82年東大法卒、農林水産省入省。96年の衆院選で初当選。内閣府副大臣、厚生労働副大臣などを歴任。衆院議員を５期務めた後、2011年の愛知県知事選で初当選した。今年２月の知事選でも圧勝し、現在２期目を精力的に務める。趣味は読書やスポーツ。学生時代はアメリカンフットボールで汗を流した。55歳。

歴史・文化、グルメにポテンシャル
航空・自動車の「産業観光」も強化

２月の知事選に圧勝し、２期目をスタートさせた愛知県の大村秀章知事が観光振興への取り組みを加速させている。2015年を「あいち観光元年」と位置づけ、スポーツ大会の誘致に向けた組織も立ち上げた。国内屈指の集積を誇る製造業に比べると比較的目立たなかった観光。27年のリニア中央新幹線開業に向け、どの観光資源にスポットライトをあて、愛知の魅力を発信していくか。大村知事の手腕に注目が集まる。

Q ２期目の重点施策の一つとして注目されている観光振興。2015年を「あいち観光元年」と位置づけ、４月に観光局を設置しました。

A 観光は地域力そのものといえる。歴史も文化もグルメも、すべてそろって観光だからだ。世界の最大の産業といえば、やはり観光産業だろう。日本にはたくさんの歴史や文化がある。私は国会議員時代から世界中を回ってきたが、日本に帰ってくると、いつも日本のすばらしさを感じてきた。街はきれいだし、自然も空気も水も美しい。食べ物もおいしい。1000年以上前の建物が残っている。これは奇跡と言っていい。

空襲にあったとはいえ、東京は様々な歴史・文化が息づいている。では愛知はどうか。見るものがないとよく言われるが、そんなことはない。名古屋という大都市には、名古屋城はもちろん、熱田神宮や大須観音、美術館などもある。少し足を伸ばせば、岡崎城や国宝の犬山城もある。歴史・文化だけでなく、グルメがあって海も山もある。交通インフラをみれば国際空港の１つがあり、新幹線は頻繁に走り、高速道路網も完備されている。国内外から観光客を呼び込めるだけのポテンシャルは十分にあるはずだ。

禁複製・無断転載

となれば、あとは意欲の問題だ。ものづくり産業が集積する愛知では、どちらかといえば観光は「来たければどうぞ」というスタンスだった。これでは大きな伸びは期待できない。もちろん日本をけん引している製造業の振興に引き続き力を入れるのは当然だが、観光振興という意味でも愛知の良さを、実際に来て見てもらう努力が必要になる。もっと外国人に愛知に来てもらい、好きになってもらう。働いて定着してもらってもいい。こういった流れをつくることが、グローバル化の一歩。来て見てもらうことで、ビジネスチャンスにつながる可能性も十分にある。私が知事として『観光をやるんだ』という意志を見える化したものが、組織としての観光局だ。

局長には海外にアピールできる素養を持った人材が必要と考え、加納国雄氏（前大阪観光局長）にアプローチした。海外でどれだけアピールできるかということが重要だと私は考える。海外で売れれば国内でももちろん売れる。今の愛知の観光における問題点は、圧倒的な認知度・知名度の低さにある。愛知・名古屋という地域の知名度をどう高めていくか。キャッチフレーズなどを含めてどういうコンセプトで売り込むかを考えていく。

Q 観光客誘致では東京や大阪、京都などとの競争はもちろん、岐阜や三重、静岡など集客を見込めるキラーコンテンツを持つ周辺県との競争も厳しい。実際に愛知に来る観光客は増えてきているのか。

A 国内全体でみると13年に外国人観光客が1000万人を超えて、去年は1300万人を超えた。今年は1500万人を超えてくるだろう。円安基調もあるだろうが、やはり中国・アジア諸国の所得がぐんと上がってきたことが背景にある。愛知でも外国人観光客は増え始めている。東京や京都で観光客の受け入れ容量をオーバーした分が、愛知にも流れてきている印象だ。日本に一度訪れてファンになり、何度も訪れる外国人は多い。お金を使って旅行するなら日本に来たいと考える外国人は多い、と私は確信している。その受け皿として愛知も観光にもっと力を入れていくべきだ。

MRJなど産業観光への期待も大きい（2014年）

愛知には素材がたくさんある。大都市、自然、歴史・文化、グルメ、なんでもそろっている。例えば愛知ならではという素材でいえば、産業観光が考えられるだろう。集積する自動車産業の見学はもちろんだが、新たな目玉として県営名古屋空港の隣接地に国産小型ジェット機「MRJ」の量産工場ができる。民間旅客機の製造現場を工場見学で見てもらうだけでなく、近隣に飛行機に関連した見学施設を用意することも検討していく。

産業観光だけでなく織田信長、豊臣秀吉、徳川家康という「三英傑」を輩出したという歴史的背景を生かした武将観光。グルメでは「なごやめし」もある。これらの素材をいかに料理していくか、何を売り物にしてどう戦略を打つか。みんなで知恵を絞っていきたい。

東京五輪、セーリング招致に力

Q 「あいちスポーツコミッション」を立ち上げ、世界的なスポーツイベントの招致にも力を入れている。東京オリンピック・パラリンピックに向けて、セーリング競技の招致にも乗り出した。

A セーリング競技の代替地として、愛知県蒲郡市での開催招致に手を挙げた。合宿地誘致にも力を入れるが、大会競技が開催されることになればそのインパクトは大きい。競技を円滑にスムーズに運営できるという点では、他の候補地

禁複製・無断転載

複合リゾート施設のラグーナテンボスも新たな集客策を次々と打ち出している

よりも上回っていると考える。ヨットレースの開催実績はもちろん、蒲郡市にはハードが十分にそろっている。必要となった場合には、追加施設の設置も比較的容易だろう。大会競技招致を機に、蒲郡をヨット・セーリング競技の聖地にしたい。

五輪は１都市開催が原則で、距離が東京から離れているという指摘もあるだろう。だが例えばサッカーの予選はどうか。東京ではなく離れた都市で開催されるではないか。ロンドン五輪でもセーリング競技は、ロンドンから200kmほど離れた場所で開催された。距離の問題が、それほど大きなハードルになるとは考えていない。

国際的なスポーツイベントは多くの集客を見込める。愛知県としても20年のフットサルワールドカップの招致、愛知県豊田市が開催会場の１つに決まった19年のラグビーワールドカップの支援も打ち出している。これに東京オリンピック・パラリンピックの競技招致が加わることになる。

東三河の魅力ある素材も発信

Q 観光産業の振興が、人口減少問題に直面する東三河の地域振興につながるとの期待も大きい。東三河でどのように観光を産業化していく考えか。

A 愛知県全体でみれば、人口は増えている。ただ全ての地域で増えているわけではなく、増えているのは名古屋から西三河にかけてが中心だ。自動車産業を中心にした圧倒的なものづくり産業が支えているといえるだろう。もちろん東三河にも産業はあるし雇用もある。ただ人口そのものは頭打ちになっており、じりじりと減り始めている。人口減に歯止めをかけるには、どうやって若い人に定着してもらうか。住んでいて楽しい魅力ある街にするかを考える必要があるだろう。その場合に定住人口と同様に、重要になるのが交流人口。入り口となるのはやはり観光だ。

東三河には観光素材はある。例えば複合リゾート施設の「ラグーナ蒲郡」だ。ラグーナ蒲郡は再建に官民が知恵を絞り、テーマパークなどの運営に実績のあるエイチ・アイ・エスも加わった。ラグーナテンボスとして前向きな投資の局面に入ったといえるだろう。山の魅力としては奥三河の山間地で、「奥三河パワートレイル」といったスポーツイベントも始まった。

観光振興だけではないが、愛知県にとっては27年のリニア中央新幹線開業という一大目標がある。だがその前段階として、日本でラグビーワールドカップが開かれる19年、招致活動を展開しているフットサルワールドカップや東京五輪などが行われる20年という、当面の目標が設定されたことになる。リニア開通を前に、通過点としての目標があるのは幸せなことだ。

質問を終えて▶▶

三重の伊勢神宮、岐阜の白川郷、そして富士山――。これら近隣県の観光スポットに比べると、愛知が持つ観光スポットの知名度は低い。中部国際空港や名古屋駅を降りた観光客が愛知県内に長時間はとどまらず、近隣県の観光スポットに向かってしまう“通過県”に甘んじてきた。遅ればせながら観光に本腰を入れることになる愛知県。観光資源の組み合わせ方や売り出し方によっては、大化けする可能性もある。他県との差を縮め、追いつき追い越していくための戦略を、大村知事を先頭にどう描いていくか。他の自治体にない魅力をどう打ち出し、発信していくかが成否のカギを握る。　（名古屋支社　**長縄　雄輝、松尾　洋平**）

禁複製・無断転載